

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成30年12月 第214号 年間購読料1,000円 (1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

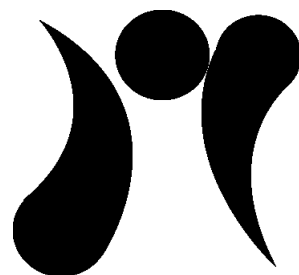
介護に潜むバトンを子供たちに —超少子社会の未来を明るく輝かせる為に—

介護職は今、不人気職業のトップにランクされます。団塊の世代、団塊ジュニア世代と、近未来の高齢者数と介護職の必要数が確実に予測される中で、介護現場が人手不足です。何故、介護に魅力が無いのでしょうか？

『予防重視型』の介護保険制度は、老いても要介護に成らない様に、重度化しない様にと、努力する事を国民に求めます。介護事業所と従事者にも『予防に資する介護』の提供を求めます。世間には「健康でこそ幸せ」の世相が拡がり、子供に迷惑を掛けたくない、と高齢者の多くが健康維持に励みます。誰しも『健康で長生きしたい』とは願いますが、生身の人間には『老いと死』は自然の摂理に添った『必然』です。今や人生100年、特に女性は50才前後で生殖機能を失った後、『その後の人生』が同程度に長いのです。その後の人生における『老いの現れ方』は願望や思惑通りには行かず、大半の人が腰痛や骨粗鬆症になり、高血圧や糖尿病・ガンや認知症にも罹り、病はなくとも心身機能が徐々に衰えるのが自然の摂理です。老いて必ず訪れる心身機能の低下や衰弱や死に対して、健康願望や予防意識を強く持つ人ほど受容れ難く、現実とのギャップに悩み、葛藤して落込み、『失意のまま』に人生を終える人が居られます。長寿の人にこそ、老いを受容れる『覚悟と備え』が必要です。

自然の摂理は、遺伝子の中に『老い』も『死』もインプットしています。生命体には『少しでも永く生きようとする本能』と共に、『老いを察知し、死期を悟る本能』が同居します。猿も象もライオンも、老いて死期を悟ると群を遠く離れ、独り静かに土に還ります。其れに対して人間は、無防備になった老いの身の全てを『仲間任せ』、集団の中で『最期』を迎えます。猿の群と、猿から進化した人間が創る『社会』との違いが、其の『最期の迎え方』に起因する様に思えます。単なる「群」ではなく『社会』を構成して生きる中で人は、

(次ページに続く)



(前ページの続き)

『思想と人間性や社会性』といった『精神的な営み』を進化・発展させて来ました。気まぐれで狂暴な自然現象と、多様で複雑な人間同士の関係性の中で生きる中、人は精神的な営みを「深化」させて思想や宗教を創り出し、科学や芸術を生み出し、文化や文明を築き上げました。その思想や芸術などの精神的な営みとその成果は、遺伝子で引継げるものではなく、社会生活における様々な経験・体験を通して引き継いできた『社会的な産物』だと思えます。そして其れは、元気な頃の経験ではなく、『死期を悟った老いの身』を委ねる暮しの中で、『逝くもの』と『介護するもの』との間で生じる『様々な葛藤』を通して引き継がれてきたものではないか、と感じます。

人は誕生と同時に『生の願望』と『死の宿命』を背負い、生きる『希望』の裏側には『諦観』が潜み『覚悟』を求めます。その『相反する価値』を背負って生きる中で人は、思想を確立して人間性や社会性を養い、宗教や科学や芸術を生み出し、次世代に引継いで来ました。『相反する価値』を背負うからこそ苦悩や葛藤の中で精神的な営みが『深化』し、『単一価値』からは生まれ得ない思想や社会性などの多様な『成果』を生み出したのです。老いの中で人は、いつまでも健康で居たいと願いながらも、いつの日か必ず衰えを感じる時が訪れ、吾身の死を予感する時期を迎えます。そして否応なく訪れる死を『受容』する時、人は『命の限り』を自覚すると同時に『命より大切なもの』を認識し、死後にも続く関係性を築いて『他者の心の中』に生きる道を拓きます。その命は、社会の歴史が続く中で『永遠の命』と成り得ます。

介護現場では今、地域の方や子供達に対して、介護に関心を持ち魅力を感じてもらう為に、各所で介護講習会を開き、介護実習の場を提供します。その中で、アイマスクを付けて歩き、車いすに乗り、紙おむつや紙パンツを穿いて介護を必要とする状態の『疑似体験』を取り入れます。体験者の大半は、怖さや不快さ・不便さ等を感じて、『障碍を持つ身の大変さがよく理解できた』と言われます。しかし、障碍を持つ身になってしまった人は、当初に感じた恐怖感や不快感の中で何時までも暮しているのではなく、その状態を受容し、その不自由さ・不快さを前提として生活を組み立て、新たな『感性や感覚』を養って生きる喜びを感じるようになっていきます。大きく『変身』しながら、疑似体験を超えた世界で生きて行くのです。『疑似体験を超えた世界』で生きている人を理解して介護するには、介護者はその人の言う事を信じるか、その人の仕草や表情から『心地よさ』を汲み取る『感性や感覚』が求められます。

『吾身をつねって人の痛さを知れ』と昔から言われますが、障碍を受容し変身した人が感じる痛さは、吾身と同じではない可能性を心に留める必要があります。『老い』の過程で人は何度も変身を繰り返し、介護する者とされる者が共に生れながらに背負う『相反する価値』の間で葛藤して思索を重ね、思想を深めて『命より大切なもの』に気付き、其れを引継ぐ事が可能になります。介護する人とされる人が共に真摯に『老いと死』に向き合うからこそ、『逝く命』からのバトンタッチが実現するのです。

人生100年、誰もが老いを生きる時代であればこそ、誰もが『介護に潜むバトン』に気付いて欲しい、と願います。『逝く命』から引き継ぐ『命より大切なものを秘めたバトン』が、新たな命の誕生と成長を支え、『超少子社会の未来』が明るく輝くのです。

～園でお母様を看取られたご家族様より～

母を偲び思う事

ご家族(二女) 和久 典子さんより

時の流れは早く、秋深い季節となってまいりました。夏真っ直中、そんな朝私の母は90年の生涯を静かに終えたのでした。施設での生活は、1年3か月という短い月日でしたが、母にとっては最期の居場所となりました。

母の半生を振り返りますと、神戸の下町大家族の長男(父)の嫁となり、多少の苦労もあったようですが、持ち前の明るさで近所付き合いも上手で周りの人をいつも楽しませる社交的な人でした。手先も器用でオシャレでとてもチャーミングな女性、娘の私から見ても乙女の心を持つ可愛い人でした。そんな母のお蔭で私達姉妹も温かく、笑いの絶えない家族で育ったのでした。両親の老後は、カラオケや旅行を満喫していましたが、23年前の震災で家は全焼し、2人の生活は一転し、私の住む加古川へ移住したのです。不便な生活だったと思いますが、穏やかな日々を過ごしていました。父が亡くなり、数年経った頃から、母は加齢に伴い、体力の衰えが始まり、段段不自由になってきたのです。転倒も頻繁に起こり、時には意識障害など…生死に関わる出来事もあり、介護サービスも受けながらでしたが、私1人の支えだけでは、困難な状況になり、申込みさせて頂いていたせりょう園へ退院後入所する事となりました。本来母の希望は、マンションで最期まで暮らしたいと願っていました。しかし、母の体の状態は限界を越えて、私達姉妹は母が安全で安心した生活が出来る事を望み、苦渋の選択でした。入所当時からはほぼベッドでの生活でしたが、いつも笑顔で職員の方々も接して下さり、まだ少し会話も楽しみ介助を受けながら食事も出来ていたのですが、半年ほど過ぎてからは会話も出来なくなり、体も痩せ細って体の機能は衰えてきたようでした。7月に入ると飲み込みも悪く、ほとんど眠っている事が多くなり、日に日に衰弱してまいりました。毎日変わりゆく母の姿を見て、心配や不安ばかりでしたが、亡くなる前夜まで見続ける事は出来たのです。しかし私の気持ちの中に最も足りなかった「覚悟」がなかった為、後後になって自分を苦しくさせたようです。多分母は自然体で天に召されて行ったと思うようにしています。最期の看取りが出来なかった事、入所した時点でその覚悟は必要だったのです。

亡くなった直後から毎日泣いてばかりの日々でした。前日までの不安や心配はすっかりなくなり、悲しみ、寂しさへと気持ちが変化していき、3か月が経った今、母は復活？し我が家の一員となり、小さな箱の中に収まり、いつも私達を見守ってくれているような気がしています。母に対して今は、安堵の気持ちと、感謝の気持ちだけなのです。母の介護や看取りを通じて多くの方々と関わり支えて頂き、学び、得られた事、そして生前母と会話した中での思いや遺志を受け継ぎ、これからの人生に生かしていければと思っています。最後になりましたが、施設の職員の方々には、本当に御苦労をおかけし、最期まで大変お世話になりました事、感謝申し上げます。またこれからの人生100年の時代を担うであろう若い介護職員の方々のお力が特に必須となるでしょう！！本当に責任の重い、大変なお仕事ではありますが、入所者さんに寄り添って頂き、心地の良い居場所だったと最後に思えますよう御尽力頂ける事を願っております。



Kさんは、平成22年頃からデイサービスをご利用されていました。私がKさんと関わりを持たせて頂いたのは、せいりょう園で働き始めた平成27年9月からお亡くなりになる平成30年7月31日までの約2年10ヶ月でした。

私がKさんと関わりを持つ中で印象に残っているのは食事をされている姿です。ご飯が入っているどんぶり茶碗におかずを乗せて手渡すと、自らスプーンを持たれ一生懸命口に運ばれていました。食事の途中で眠ってしまう時は声をかけ介助させて頂きましたが、Kさんは目を閉じておられても口の中のものなくなると、口を開けられて食べ物を運ぶと咀嚼、嚥下をしっかりとされて、デイサービスの食事では毎回、ほぼ全量召し上がられていました。

また、Kさんは女性がお好きな方で、職員の手を握って来られたり、キスをしようという素振りをされる事もありました。Kさんに「だめですよ！」と注意すると、いつもニコニコ笑われていました。Kさんにとっては、職員に注意されることもコミュニケーションの一貫だったのかな？と思います。

Kさんは長年リバティかこがわで暮らされていました。せいりょう園で働き始めた頃の私はサービス付き高齢者向け住宅での暮らしというのがよくわからなかった為、自分で歩くこともできない方が、どうやって一人で暮らされているんだろう？と不思議に思い、先輩職員に尋ねました。Kさんがリバティかこがわに入居された当時は、老人車を使用されご自身でデイサービスに歩いてこられていましたが、徐々に状態が落ち、私の出会った頃のKさんになられたこと。状態が変わっていかれても、ヘルパーや、訪問看護、デイサービスなどの様々なサービスを受けられ、周りの手を借りながら、自分のお部屋で、ご自身のペースで過ごされているということ。等々を教えていただきました。

Kさんが最後にデイサービスを利用されたのはお亡くなりになる2週間ほど前でした。デイサービスは、体調が悪くなるとお休みされそのまま利用終了になることが多いため、Kさんに限らず、利用者の最期の姿というのはほとんど目にすることがありません。私は今回Kさんを通して自然に老いていく過程というものを感じさせていただくことができました。これからもデイサービスの職員として自然に老いていかれるお年寄りの手助けを少しでもさせていただきたいです。

焼きいもカフェ【平成30年11月22日】



ボランティアの方々が「焼きいも〜♪」とご近所にやってくる焼きいも屋さんのように言いながら、寒空の中さつまいもを焼いて下さいました。そして一緒に話をしながら楽しい時間を過ごすことが出来ました。

この季節はやっぱり焼きいもです！皆さん焼きいもをほおばりながら季節を感じ、笑顔になり身体と共に心もほっこりと温まったのではないかと思います。

（地域密着型特養 伊藤 洋子）



Nさんの看取りについて

グループホーム 高瀬 美咲
(介護福祉士)

私は3月までユニット型特養に配属されていました。その時のNさんと関わった話をお伝えしたいと思います。

Nさんは平成27年5月にユニット型特養に入所されました。脳梗塞による軽度の左半身麻痺がありましたが、入所当初は車椅子からベッドの移乗やトイレの移乗など職員が見守り中、自身で行うことができ、活発な時には足で床を蹴りながら車椅子でホール内を自走されていました。

Nさんは42歳の頃に体調を崩した際、知り合いのお坊さんに拜んでもらったことがきっかけで、京都の本能寺で修業し僧籍を取得され、入所してからも日課として拜まれていました。毎食後、食器を下膳する時に「下げてもいいですか?」と声をかけると「置いといてくれ」と言われ食器を前に両手を合わせてしばらく拜んでいる姿が印象的で今でも思い浮かびます。寒さが大の苦手、パットを交換する際やお風呂での衣服の更衣も暖房やタオルなどで寒さを防ぐ対応をしていましたが「寒いやないか!」と大きな声で言われることもあり、強い口調で言われた時は、私も落ち込むこともありましたが、一つひとつのケアを丁寧にするのをNさんから教えていただきました。時には職員を気遣い、「お腹すいてないか」「変わったことはないか」「大丈夫か」「あんたも早く寝なあかんで」と声をかけてくださいました。夜間に空腹の訴えがあればNさんの好きなコーヒーを提供し、「あーうまいわ!こんなうまいの初めてや!」と言い一緒に笑い、喜ぶ姿を見て嬉しかったことも思い浮かびます。

起きたいときに起きて、寝たいときに寝る。日々自分のペースで過ごされていましたが徐々にベッドや車椅子に移ることが困難になり、なんとか自身で移ろうとして転倒し身体には内出血が多くできていました。Nさんの転倒を防ごうと一時的に柵を増やして対応していましたがNさんは動きたかったようで自身で柵を外して起きていました。ベッドの周囲を柵で囲むと拘束になります。たとえリスクがあっても今までのように起きたいときに起きて生活してもらおうことがNさんらしい生活を送れたのではないのかと振り返りを通して感じました。

平成30年2月に、ターミナルの状態が進行していると主治医より話があり2月26日に永眠されました。ご家族も私も看取る瞬間には立ち会うことはできませんでしたが、亡くなる数時間前にはご家族やお孫さんが集まり最期の時間を一緒に過ごすことができました。Nさんの姿を通して、ケアの在り方を気づかせてくれました。今後も安心感や入居者の気持ちを大切にケアを実現していきたいです。課題としては、ご家族との関わりを状態報告だけでなく日常的な会話も含めて入居者の情報をもっと引き出していけたらと思います。これからも経験を重ねて成長していきたいです。



晴香うらら新春コンサート

日時：平成31年1月29日(火) 14:00~
場所：地域密着型特養1階ホール



加古川市を中心に活躍している演歌歌手、晴香うららさんの新春コンサートを開催します。ご家族の方々も、お時間が合いましたらぜひご来園ください。



師走に入ってきました。今年最後の仏教講話は、加古川町寺家町にあります光念寺の本多正尚ご住職です。事前をお願いしておりましたご住職が、ご予約が入り直前に本多ご住職をお願い致しました。快くお越し頂きました、感謝しております。

午後3時からのご講話でしたが、お忙しく昼食も召し上がる間もなく、来て頂きました。ご挨拶され、「お互い拝み合いしましょうか。」と声かけて、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、ナマンガブツ、ナマンガブツ・・・」と唱えられ、始まりました。

「私のお寺は、本尊は阿弥陀如来で宗祖は親鸞聖人です。親鸞聖人は粗末な物を着てお金の無い生活をされておりました。インドのお釈迦様の衣類はカーシャと言って、地味で目立たない物でした。私達はお布施というのを貰いますが、この布をどうぞ使って下さいと言って、頂いた事からきた言葉でしょうか。昔はその日に頂く食べ物を、もらいに回る托鉢がありました。また、若い時分はご先祖様、如来様にお供えをしてから、お下がりをお願いしておりました。一番にご先祖様でした。段々に厚かましくなってきたように思います。1つ貰えるんだったら2つ、2つ貰えるんだったら3つというように、根こそぎになってしまいます。自分が食べる分だけ貰っていいのですが。」と話されて、桃太郎さんの話を例に挙げられました。キジ、サル、イヌが『お腰につけたキビ団子を一つ私に下さいな』という所ですが、なるほど全部じゃなくて、欲張らないという意味が込められているのだなと思いました。

「桃太郎さんは、おじいさん・おばあさんに孝行しましたが、孝行ってというのは何でしょう。そういう言葉を今は聞く事がなくなりました。孝行は恩です。なされた事を知る、してもらった事を身につけるという事です。『ありがとうございました』と形に表す時にお供えとなります。人に対して恩に報いる事ですね。食べ物でも、声を出さない物で料理を作り、自然に対してありがとうございますという気持ちを出していく、そしてその物に対して恥ずかしくないように、生きていかなあかんと思います。」続いてある受験生の話をされました。

「とても頭の良い子でした。常にもう一人の子と1番、2番を競っていました。近頃はその子がずっと1番でした。ところが、受験で2番の子が通って、自分が落ちてしまいました。落ち込み、誰にも会いたくないと家に籠っていると、合格した子が訪ねて来ました。会いたくないと断ったのですが、お母さんが友達なんだからと通してしまいました。合格した子は部屋に上がって来て、目を真っ赤にして泣いていました。『ごめん、僕だけ通ってしまっ、ごめん!』それだけ言って、泣きながら帰りました。落ちた子は自分の姿を恥じました。『自分は何を考えていたのか。恨んでしまうなんて。』

法然上人のお父さんは、恨みをかった人に襲われて、その怪我が元で亡くなられました。お父さんは、亡くられる前に『やつを恨んではいかん。恨みはどこまでいっても終わる事ではない、忘れる事しか道はない。』と言われた。それが、法然上人が仏門に入ったきっかけでした。恨みを越える、私が全ての人に、この世に存在させてもらっている、と気がついたのです。如来様は、『困った時はお母さん!』と言って呼ぶよ

うに、私を呼びなさい。見捨てない、南無阿弥陀仏と呼びなさい。』とおっしゃいました。人に対してその心の姿勢を続けていくという事が『私の命の責任を果たす』という事なのかも知れません。あるがままで、喜びを持って日々を過ごして頂きたいと思います。

今年もあとひと月もなくなってまいりました。ここまで皆様、風邪もひかずに来られました。喜んでもらう事が出来る日を、迎えて下さい。」と穏やかに話されて、ご講話が終わりました。前の方の席あたりから、終始笑い声が興っていました。ご住職の柔なお顔と、語りかけて下さる優しい声がこの雰囲気をかもし出していたのだと思います。

ありがとうございました。来年の仏教講話は、1月はお休みで2月からです。

(サービス付き高齢者向け住宅相談員：岡村 照代)



勉強会で自身を振り返る

地域密着型特養 田中 慎也
(介護福祉士)

8月21日に全職員対象となる勉強会を行い、「日々の仕事でどのように感情をコントロールしているか」というテーマでグループワークをしました。

この勉強会を終え、さまざまな意見が出て自身の振り返りをしました。入社当初は何もわからない状態で仕事を始め、感情をコントロールするより仕事を覚えることが一番だったのでイライラするようなことは多くありませんでした。年数が経つにつれ仕事に対し慣れも出てきた為か、言葉遣いや態度にイライラした雰囲気が出ていたようで、当時の先輩職員に注意をされたことがあり自分自身そのことで悩み、とても落ち込みました。このまま続けられるのかと考えたこともありました。そのこともあり、自分を見直すことがあります。

今でも感情のコントロールがうまくできているかと聞かれると、「はい」と即答できない私があります。まだまだ私自身未熟な部分があるからです。他の職員から「顔が怖いよ」と言われる時もあり「自分はまだまだや」と感じています。人に言われる前に気づくこともありますが、それはことを終えてから気づき、「やってしまった」と後悔します。後悔と反省をして「次は同じような失敗はしない」と思い日々の業務に努めています。

私は、仕事だからといって全てを割り切ることができません。仕事と割り切ればイライラすることも少なくなっていくのかもしれませんが、私の性格もありますが、「近い家族」のように感じ全てを仕事として割り切ることができない。一緒に笑って、その日一日を楽しんで生活してほしい、少しでもよい思い出を作してほしいと考えています。そのことが良いか悪いかはわかりませんが、そのように思うとイライラするときもあって良いのではないかと思います。ただそれを利用者、ご家族にみせることは間違っています。そこは仕事だからと割り切ることになります。

ストレスがない人はいないと思います。人はどこかでストレスを感じて生きています。そのストレスとどのようにして付き合っていくのが大切ですが、私は未だにどのようにして付き合っていけばよいかわかっていません。もしかしたら、それに対する答えはすぐには見つからないかもしれませんが、日々の関わりの中から見つけていきたいと思っています。

サービス付き高齢者向け住宅入居者募集中！

全室にバス・トイレ・キッチンが付いており、元気なうちから入居していただけます。また介護が必要になってもヘルパーや訪問看護などを利用しながら、最期まで住むことができます。終焉を見据えた住み替えをお考えの方は是非一度ご見学ください。

[せいりょう園介護相談室 TEL (079) 424-3433]



↑自愛の家さくら

↑リバティかこがわ

ひょうご介護サポーター研修参加者募集！

介護の1日体験講座です。予備知識や資格は必要ありません。
講義だけでなく、利用者さんとの交流を図ることで
認知症の理解を深めていただきます。

募集対象：中・高年齢者、子育てを一段落した女性、退職者等（資格は不要です）

募集定員：20名 ※先着順

日時：平成31年2月27日 10:00~16:30

開催場所：特別養護老人ホームせいりょう園

受講料：無料

内容：10:00~11:00 講義
11:00~13:00 業務体験（昼食・休憩含む）
13:00~14:00 利用者さんとの交流
14:00~16:30 実技



申込方法：別紙「参加申込書」に必要事項を記入し、FAXか郵送にてお申込み下さい。

〒675-0016 加古川市野口町長砂 95-20

TEL (079) 421-7156 FAX (079) 421-6422

【せいりょう園空き情報（平成30年12月15日）】

●サービス付き高齢者向け住宅

①リバティかこがわ：9室（33㎡:4室、35㎡:2室、39㎡:2室、41㎡:1室）

②自愛の家さくら：8室（19.1㎡:2室、24.7㎡:4室、25.8㎡:2室）

●ケアハウス：空きなし（バス・トイレ・キッチン付 24㎡）

●グループホーム：空きなし ●グループホームまどか：空きなし

[問合先] せいりょう園 TEL(079)421-7156/(079)424-3433

